

第7章 まとめ

第1節 丹波焼について

1. 中世丹波焼

中世丹波焼についての定義は、多紀郡今田町周辺で生産される焼締陶である。その丹波焼については、文献のとおり、研究が進められているが、大正から昭和初期にかけて、柳宗悦の“日本民芸運動”に呼応して、丹波地方において中西幸一、守田種夫他が衰退していた丹波焼を見直し、古陶の収集を通じ、丹波焼の再評価への糸口を探る。戦後、人文研究の一貫として、簀内清他が『立杭窯の研究』を著し、丹波焼陶工集団の基礎的な総合研究を行う。また、杉本捷夫は、はじめに『丹波の古窯』を著し、兵庫県陶芸館の事業と併せ『改訂丹波の古窯』を完成させ、丹波焼の復興の糸口となる。中西 通は、父幸一の遺志を受け継ぎ、丹波古陶館開館時に『古丹波』をまとめる。陶芸館・古陶館両館の活動が、丹波焼の美術史的評価を受ける原動力となる。

昭和40年代後半宝塚市堂坂遺跡の蓄銭壺の発見を契機とし、昭和50年代に『陶磁大系』、『日本のやきもの』、『兵庫のやきもの』、『世界陶磁全集』、『日本陶磁全集』の発刊に伴い、美術史的価値を確立するとともに、楢崎彰一の「伝世品による型式学的研究」が確立した。丹波の大槻 伸の作業もその流れにある。更に、三本峠北窯の灰原・物原の調査などを経て、丹波窯が愛知県常滑窯・渥美窯のいわゆる陶器系窯の影響を受け成立することが理解されるに至った。一方、昭和60年代に入り、近世考古学の分野から、遺跡出土の丹波焼の編年的研究も序々に進められ、中世の領域に遡上ってきつつある。今、中世考古学、特に調査例が増加するに至り、遺跡からの中世丹波焼研究が待たれている。

2. 器種と法量

中尾城跡出土の丹波焼のうち、口径・底径・器高の相関関係を土器造りの作業工程と考えていく上で、各々の値を計測できるものを図化及びグラフ化を行ったものが、器種形態表及び法量表である。法量については表でcm単位で示しているが、ここでは、中世大工尺の曲尺(1尺=30.3cm)に換算し、作陶の物指を考えることにする。

はじめに器種形態表(第11表)をみると、器高については、器種分類が可能で4寸(12cm)を小瓶、5・6寸(15.18cm)を小甕、壺は9寸(27cm)から1尺2寸(36cm)と1尺4寸(42cm)を超える2種、甕は1尺~1尺4寸(30~42cm)と2尺(6cm)を超える大甕に分かれる。底径は3寸(9cm)から6寸(18cm)の幅であり、土器造りの一番の基準となる寸法で、小物

(小瓶・小甕)は3寸(9cm)、壺・甕類は6寸(18cm)をめどに、粘土円板の底打ちを
口径は、壺・甕は4寸～1尺(12cm～30cm)、1尺4寸(42cm)、1尺8寸(54cm)と規格
を2寸(6cm)毎にみとめる。

法量を見直すと、器高については、壺が7・8寸、1尺1寸、1尺4.5寸、甕が9寸、1尺2
寸、1尺7寸、播鉢が4・5寸、捏鉢が4寸となる。底径については、壺が4.5～6.5寸、甕
5～6.5寸、小瓶が2.5～3.5寸、徳利が4.5寸、小甕が4.5～5寸。播鉢が4・5寸、捏鉢が
となる。口径については、壺が3.5寸、4.5～5.5寸、7.5寸、甕が5.5～7寸、9寸～1尺
1尺4.5寸、1尺8寸、小甕が3.5～4寸、播鉢が8.5～1尺2寸、捏鉢が9寸となる。壺
小甕について第12表法量表をみると、器高/底径は1～2が小甕、壺・甕、2～2.5が壺
3～が壺・甕に分かれる。口径/底径は0.5～1.0が小甕、1.0前後が壺、1.5が甕を示す。口
胴径は、資料が少ないが、0.4～0.8に壺・甕が分かれ、0.6以上のものを甕と呼ぶ。前述の排
器種分類模式図となる。中でも、播鉢については、底径4～5寸にとり、口径は8寸、9
1尺、1尺1寸、1尺2寸と分かれ、1尺1寸のものが多し。播鉢の作陶については、現
立杭窯では丹波焼播鉢の規格について8寸、尺、尺2寸と口径で区別しているようで、伝
な作陶技術が残っている。また、底径：器高：口径＝1：1：2～2.5の比率を示してい
13表)。法量は、第1に底打ちにより規定される5分刻みの底径があり、壺、甕、播鉢に分
準で示した規格を持たせ、乾燥時の縮みを経験の上で計算し、窯内の炎の変化を経て仕上

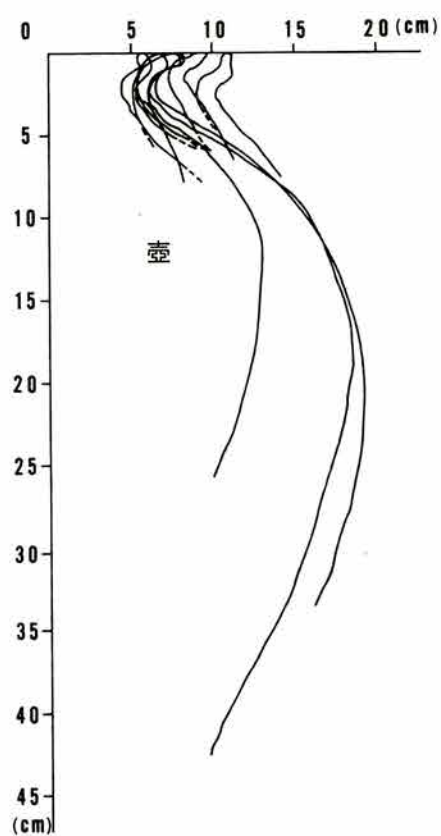
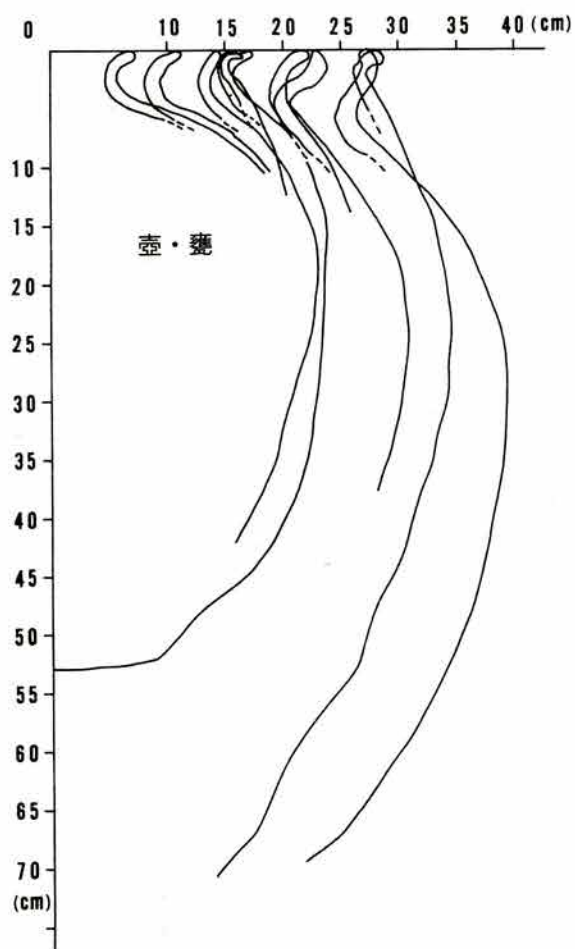
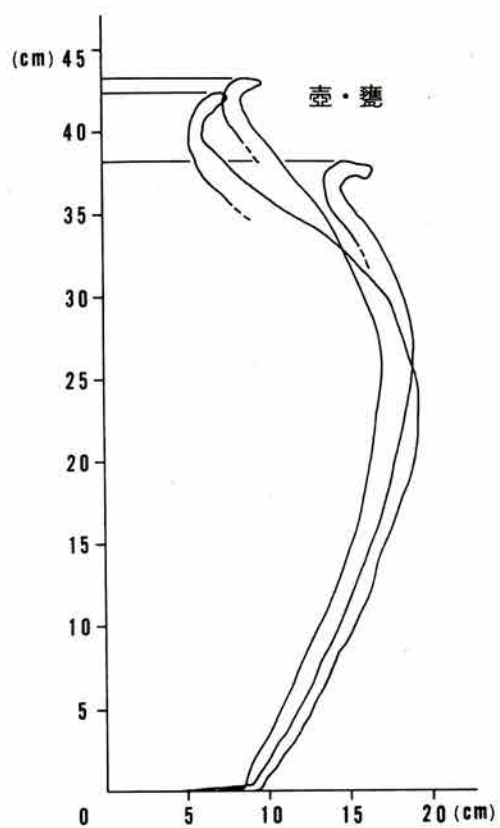
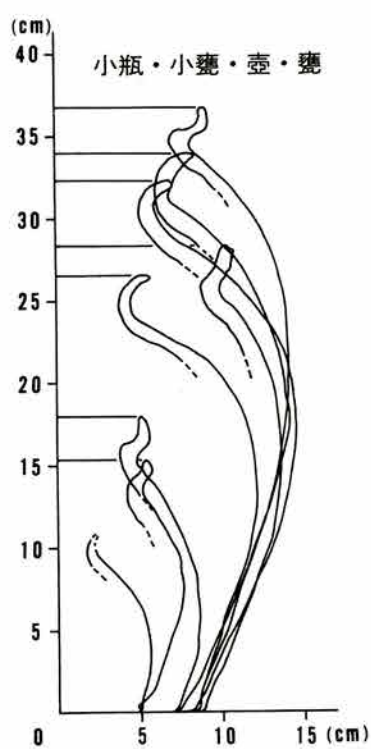
3. 編年

中世丹波焼は、他の中世陶の研究と異り、窯跡の調査研究が進まず、わずかに三本峠北窯
原のみの調査例と、既発見の窯場出土の少い資料を基本とし、丹波焼が東海の瓷器系窯の
化に成立することを、三本峠北窯出土の秋草文、三筋文、連弧文等の製品や、西脇市緑屋
窯構造・分焰柱や製品から類推するに及び、常滑・渥美窯の調査研究における型式学的研
主導する檜崎は、伝世品による丹波の型式学的研究を確立している。

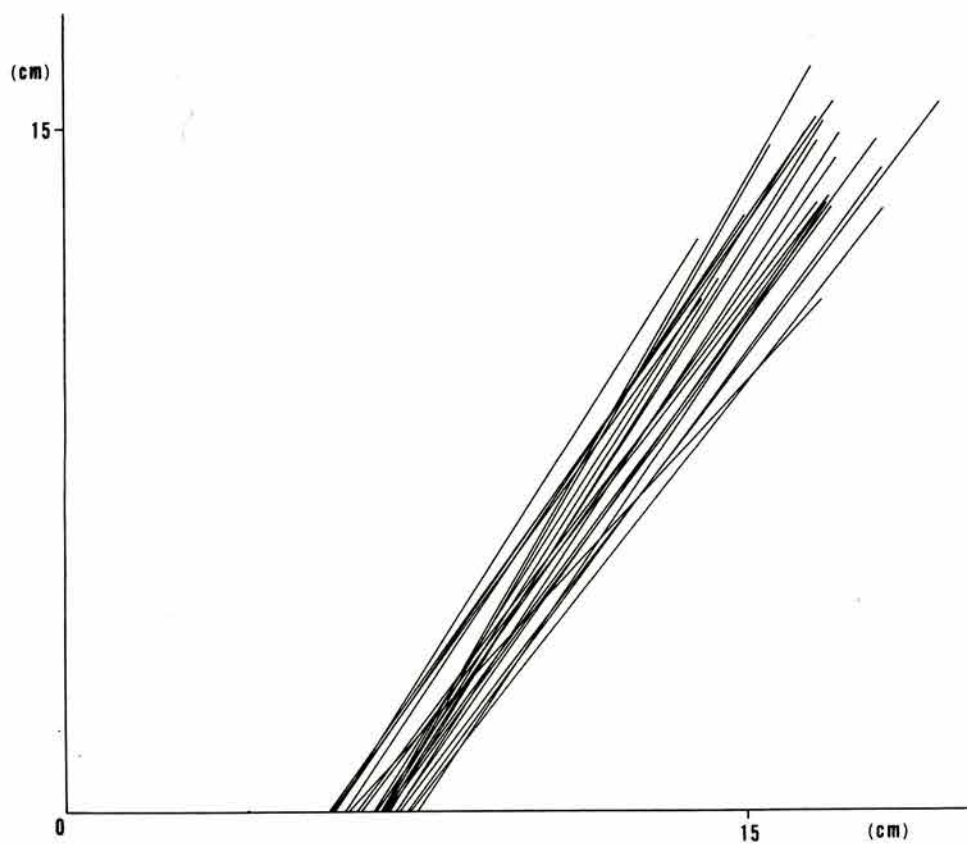
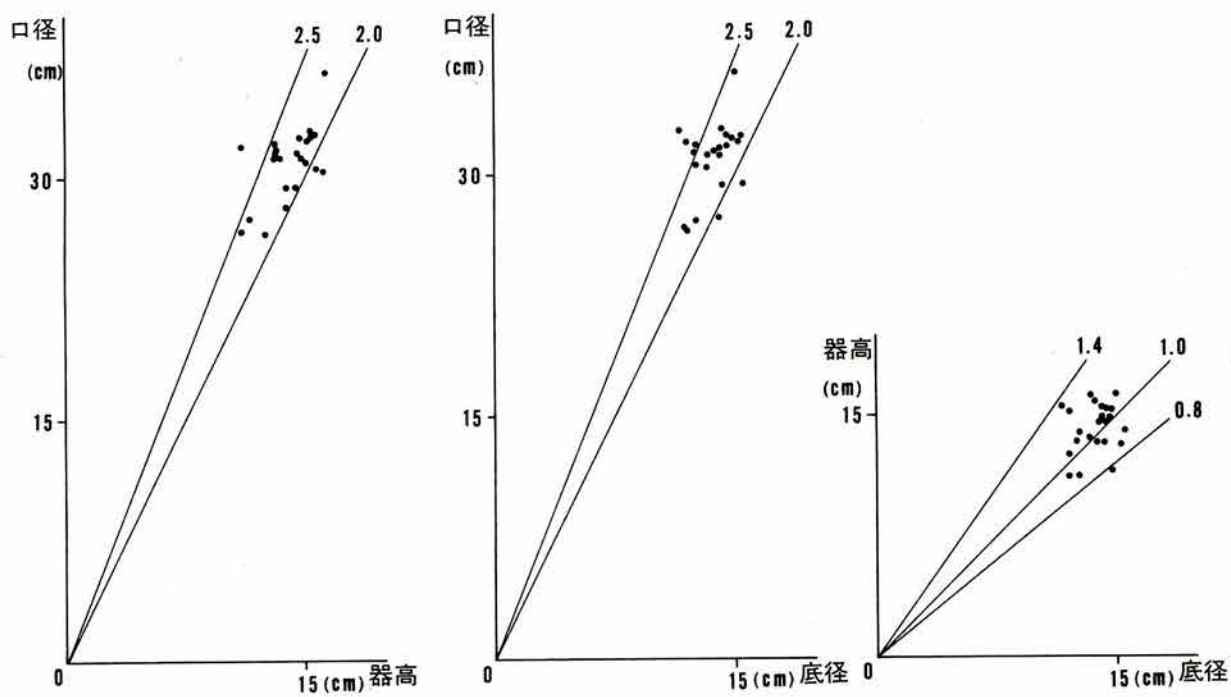
その研究から、6時期に分類された時期区分のIV・V期(室町時代)については、生産
窯がいまもって、不明であるが、伝世する製品が多く、中尾城跡はじめ中世城館出土の製
多い。

ここで、IV期・V期の基準資料の操作を行うことが必要となるが、遺跡単位の土器組成
析する資料を検出する遺跡が少なく、ここでは、時代毎に大まかに、壺・甕・鉢の分類の
配置した丹波焼集成図をみることにする。

中世陶の器種として壺・甕・播鉢のセットの成立が論じられる中で、中世丹波の成立期
瓷器系窯の影響を受け、壺、瓶、甕類や碗・鉢類などが窯で生産されており、播鉢の生産



第11表 丹波焼器種形態表



第13表 丹波焼 撞鉢法量法

桃山時代を経て、江戸時代初期に茶陶が盛行することになり、器種の多様化を生むとされてきた。

ここで、遺跡出土の丹波焼の集成を試みるに、中尾城跡を中心に室町時代に主眼におき、若干の古い資料を入れ、器形変化を念頭に入れた。中尾城跡で伝世した土器と考えられる壺・甕があり、15世紀前半の時期に比定するB25とB9がある。甕では鎌倉時代大内城(27)、福井遺跡(33)、南北朝時代沢ノ浦坪古墳群(23)といった算盤玉状の形態とは一線を画するものであるが、15世紀後半の内場山城跡(22)に近い口縁の形態をとる。壺は内場山城跡、笑路城(32)、堂坂遺跡(12)の形態と似ており、前代南北朝時代の喜多中世墓(26)、高川古墳群(2)、堂坂遺跡(12)、福井遺跡の口縁の形態が外反する変化ととらえより後出のものである。

15世紀後半は壺B1・B10があり、口縁の外反度が強くなり、笑路城と似た形態をとる。16世紀前半は、甕B27・B30・B24、壺B2・B3・B17・B16、小甕B33・B60・B55・B57～59、小瓶B45、捏鉢B102・B104、播鉢B80・B81・B84・B87・B96・B99といった器種が多様化する。小甕や鉢類では細分が可能である。甕では福井遺跡、壺では釜屋城(7)などの資料と比較でき、口縁端部が丸くなる。16世紀前半は、大甕の出現を特徴としB31、B2と甕B26、B29がある。壺はB4、B21があり、器形が丸味を帯び、猫搔手が残る。小甕B36も、丸い器形で安定した形態をとり、洗練されている。小瓶B44、B46と徳利B50が、おそらく備前焼徳利の影響化で、器種が生み出される初めのものとなる。鉢類はB91、B97、B101の播鉢があり、卸目一本引きの手抜き作業がみられ、ここにも、備前焼の櫛目の影響を受けている。この時代では、有岡城(13)、福井遺跡の壺や、上林城(30)の小瓶に似た器形を求める。

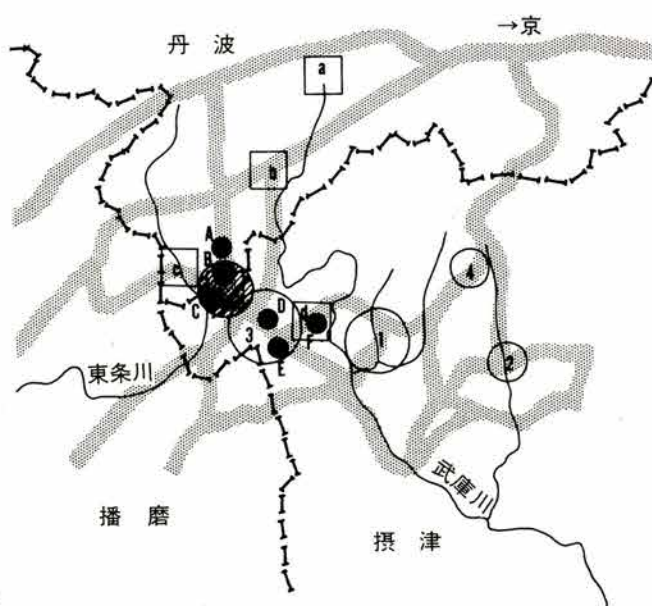
ところで、播鉢についてであるが、陶器系の碗や鉢の流れをくみ、丹波隣国の東播磨の須恵器捏鉢の影響を受け、早くから捏鉢が三本峠北窯では生産されていた。鎌倉時代から南北朝時代にかけて、平井遺跡(6)、塩田遺跡(39)、八木ノ谷中世墓(5)、南台遺跡(4)、堂坂遺跡、井ノ方遺跡(3)の多くで、蔵骨器や蓄銭壺の蓋として転用される捏鉢がある。播鉢は堂坂遺跡のものが古いとされ、手印が大きい国領遺跡(25)がある。ただし、大内城跡の播鉢は、実見しえないが、鎌倉時代の甕と共伴するもので、年代を上げて載せているが、今後の検討の余地がある(挿図108)。

以上、概略的に器種毎の器形変化を配置し、共伴の備前焼、瀬戸・美濃焼の年代観をもって、時代を分けたもので、今後、遺跡単位の検討を加え、集成作業を通じ丹波焼の組成を中心に編年を確立する作業を続けたい。

4. 陶土・胎土

丹波焼の陶土に関する研究は福井県窯業試験場の分析(文献12)や京都大学清水芳裕(文献18)の胎土分析及び本報告付載の三辻先生の分析があるが、丹波焼窯跡の陶土採土地については、古く文禄3年(1594)、元和6年(1620)、宝永3年(1706)銘の土取場絵図が残っている。

挿図109は中世丹波焼の生産地である三本峠周辺の古代から中世までの窯跡群と文禄3年土取場絵図などにみられる陶土採土地を示している。丹波隣国摂津(現三田市域)は、1. 末窯跡群(5世紀後半～10世紀)、2. 木器窯跡群(8世紀～10世紀)、3. 相野窯跡群(9世紀末～10世紀末)、4. 見比窯跡群(12～13世紀)の須恵器生産地帯がある。一方、三本峠を中心に中世丹波焼窯跡群があり、桃山時代を経てA. 上立杭、B. 下立杭、C. 釜屋、D. 蔦ノ尾、E. 相野、F. 四辻など近世の丹波焼窯が丹波地方から隣国摂津国へ拡散する。桃山時代以降の土取場絵図であるが、陶土採土地と



挿図109 窯跡群と粘土採掘地

○須恵器窯 古代～中世 ●中世丹波窯 ●近世丹波窯 □粘土採掘地

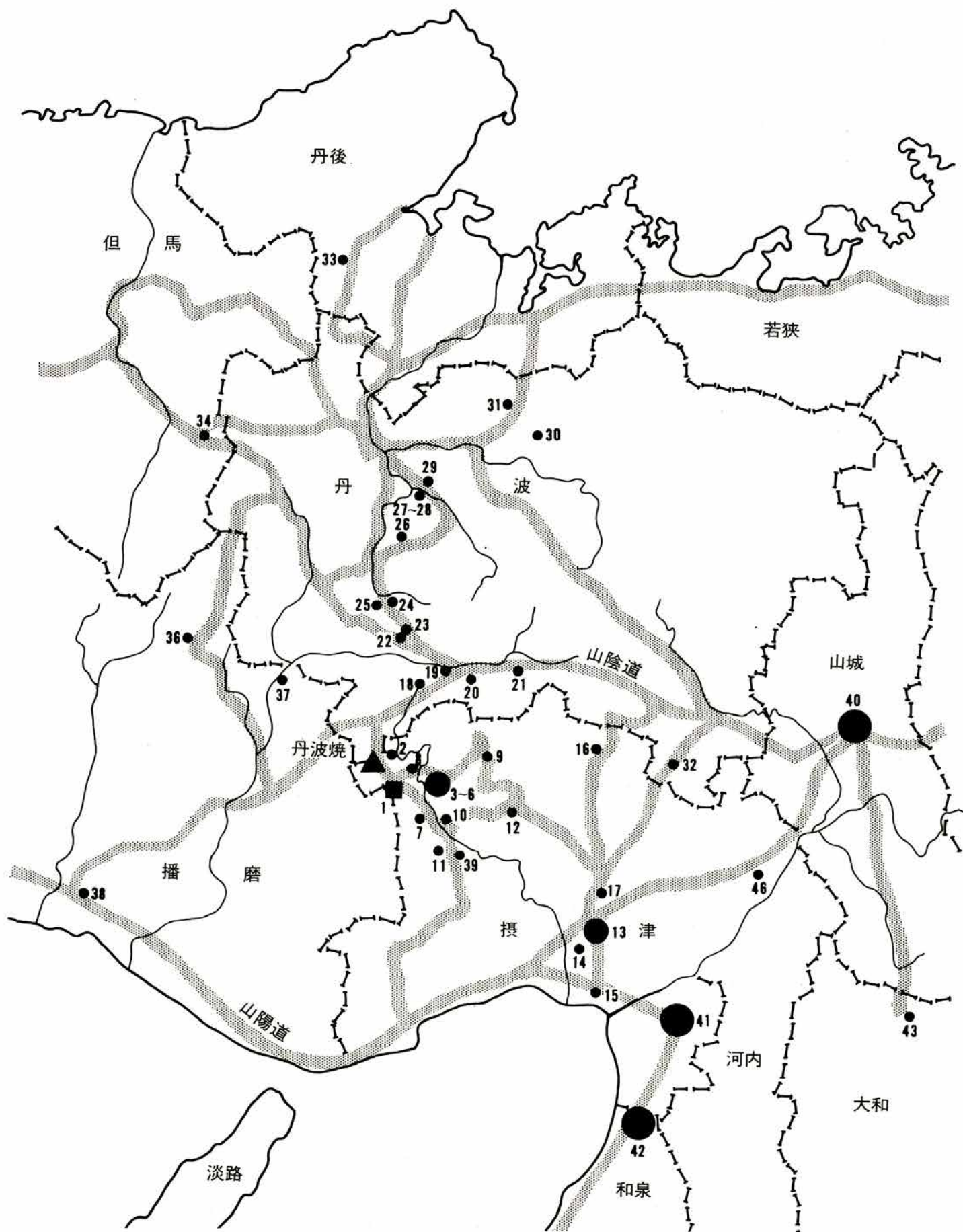
してa. 弁天、b. 古市、c. 木津、d. 四辻と窯場を離れた土地での採土が行なわれ、現在では四辻が、窯場付近以外として大きな採土地として操業されている。

中尾城跡出土の中世丹波焼について生産された窯が同定できない状態がある。一方、楯崎彰一は、丹波焼の変遷を平安末期から桃山時代まで6期に分けており、I期平安時代後期～鎌倉時代前期(三本峠北窯)、II期鎌倉時代中・後期(太郎三郎窯、源兵衛山窯、床谷窯)、III期鎌倉時代末期～南北朝時代(稻荷山窯)とし、IV期室町時代前～中期およびV期室町時代中期末～後期の2時期については、古窯跡は知られていないが伝世品が多いとされている。VI期は丹波における窯跡最後の桃山時代(釜屋窯)である。中尾城跡出土の丹波焼はIV・V期のものが中心で、窯場の特定には至っていない。また、付載の三辻先生の胎土分析では、陶土に2系統がみとめられ、窯場周辺と四辻周辺となる近世下相野釜屋釜に近い胎土を示しており、中世でも古い時期の三本峠、大南の山土のみを陶土としていた様相とは異なり、土取場絵図に近い状況を示していると思われる。

5. 消費

丹波焼の流通については、四方を山に囲まれ、河川も小さいという地理的な条件から、商圏の狭さがかつて述べられてきたが、中世遺跡出土の丹波焼についてみると挿図110と第14表の通りとなる。

鎌倉時代は、墓地出土の蔵骨器としての出土例が多く、京都府福井遺跡、大内城跡の甕や鉢がある。丹波、丹後、(北)摂津に分布をみる。南北朝時代は、やはり蔵骨器としての出土例が多いが、兵庫県堂坂遺跡などにみられる蓄銭に使われ、丹波や(北)摂津の集落跡に多くみら



挿図110 丹波焼の消費地

れるようになる。室町時代になると、山城、館、集落などからの出土が多く、地域は、丹波、丹後、播磨、摂津、山城、河内、和泉、大和、紀伊などに散見されるようになり、室町時代後半になると畿内の消費都市京や石山本願寺（大阪）や摂津で丹波攻めの拠点となる城郭に出土している。出土量は少ないが、（北）摂津の現三田市や神戸市北区の集落跡には当然出土例が多く、壺、甕、播鉢といった器種が中心で、他は稀れである。

丹波焼の流通の背景には、他の流通圏を確保している生産地があり、そのすき間を縫うように出土している。西は備前焼の生産地の隣国播磨では、わずかに御着城や中世の交通要所であった福田片岡遺跡に散見され、東播磨の西脇や多可郡の山城や産銅遺跡に出土する。摂津も城郭の調査が進んでいるが、備前焼が主体で、瀬戸・美濃焼の占有率より低い出土状況にある。北の但馬、丹後は、備前焼が入りこむが、越前焼の勢力圏にあり、但馬では、山陰道沿いの粟賀駅の近くで出土をみるにとどまる。地元丹波においても、小物の秀品については備前焼が主となり、播鉢でも城館では使用されている状況で、丹波（南の産地近く）、北摂津（現三田市域、神戸市北区）の集落跡でようやく、土器組成の主体をなすのである。戦国時代、京の隣接の丹波を占拠する軍による軍略で、畿内周辺の勢力が丹波攻めを行うことにより、逆に丹波焼が各地に流通していくようである。後に、桃山時代以降には茶陶を介して、流通の勢いを増す状況と似ている。

遺跡出土の丹波焼の組成を抽出しようとするにも一遺跡で、中尾城跡ほど各器種が出土する例がなく、挿図108に、壺、甕、鉢に分けて時代幅で配置するにとどまる。

ただし、近畿自動車道舞鶴線関連の内場山城跡⁽²²⁾、初田館跡⁽¹⁸⁾では、丹波焼の各器種と備前焼、瀬戸・美濃焼、中国産磁器や土師器との共伴があり、組成については、次回において詳述することになる。組成の検討により、丹波焼研究においても進展する状況にあることを述べるにとどめる。

参考文献

1. 薮内 清他『立杭窯の研究—技術・生活・人間』恒星社 1955
2. 杉本捷夫『丹波の古窯』神戸新聞社 1957
3. 杉本捷夫『改訂 丹波の古窯』兵庫県陶芸館 1969
4. 中西 通『古丹波』丹波古陶館 1971
5. 高井悌三郎他『堂坂遺跡発掘調査報告書』宝塚市教育委員会 1971
6. 河原正彦「丹波」『陶磁大系』第9巻 平凡社 1975
7. 中西 通他『丹波の窯業—今田町立杭を中心に—』兵庫県教育委員会 1975
8. 中西 通「丹波」『日本のやきもの』7 講談社 1976
9. 青木重雄『ひょうご百科 兵庫のやきもの』神戸新聞出版センター 1976
10. 河原正彦「丹波」『世界陶磁全集4 桃山(-)』小学館 1977

第14表 中世遺跡出土 丹波焼一覽表

番号	遺跡名	所在地	集落の種類	時代	表	遺跡	出土	丹波焼	共伴遺物	参考文献・備考				
					意	遺跡	土器	小瓶	その他	備前	新石器	中国	その他	
1	中尾城跡	兵庫県三田市下相野	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	本書報告
2	高川古墳群	〃 〃 藍本	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和60年度』1988
3	井ノ刀遺跡	〃 〃 末東	集落	南北朝	△	△	△	△	△	△	△	△	△	『青野ダム建設に伴う発掘調査報告(2)』1987
4	南台遺跡	〃 〃 末西	斎院	室町	△	△	△	△	△	△	△	△	△	〃
5	八木ノ谷中世墓	〃 〃 〃	墓	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
6	平井遺跡	〃 〃 〃	集落	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
7	釜屋城跡	〃 〃 貴志	山城	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
8	田中一ノ坪遺跡	〃 〃 東本庄	集落	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
9	川原・灰原遺跡	〃 〃 川原	集落	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
10	川原・藤ノ木遺跡	〃 〃 川原	集落	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
11	毛原遺跡	〃 〃 神戸市北区	集落	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
39	坂田遺跡	〃 〃 〃	墓	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
12	堂坂遺跡	〃 〃 宝塚市大原野	斎院	南北朝	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
13	有岡城跡	〃 〃 伊丹市	城	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
14	富松遺跡	〃 〃 尼崎市	?	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
15	尾崎城跡	〃 〃 〃	城	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
16	姫島遺跡	〃 〃 大阪府豊能郡能勢町	墓	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
17	池田城跡	〃 〃 池田市	城	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
46	高槻城三ノ丸跡	〃 〃 高槻市	城	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
18	初田館跡	〃 〃 兵庫県多紀郡田原町	館	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
19	尾徳川天神裏遺跡	〃 〃 〃	集落	南北朝	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
20	八上城跡	〃 〃 〃	城	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
21	安養寺跡	〃 〃 〃	墓	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
22	内場山城跡	〃 〃 西紀町	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
23	沢浦寺古墳群	〃 〃 〃	古墳	鎌倉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
24	河津館跡	〃 〃 氷上郡春日町	館	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
25	国領遺跡	〃 〃 〃	集落	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
26	喜多中世墓	〃 〃 市島町	墓	南北朝	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
27	大内城跡	〃 〃 京都府福知山市	山城	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
28	仁田遺跡	〃 〃 〃	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
29	多保山城跡	〃 〃 〃	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
30	上林城跡	〃 〃 綾部市	山城	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
31	平山城跡	〃 〃 〃	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
32	穴路城跡	〃 〃 亀岡市	山城	鎌倉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
33	福井遺跡	〃 〃 与謝郡加悦町	墓	鎌倉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
34	但馬 和賀・黒坂遺跡	〃 〃 兵庫県朝来郡山崎町	生産	南北朝	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
35	櫛崎 石垣山遺跡	〃 〃 多可郡中町	生産	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
36	多田上野入遺跡	〃 〃 〃	生産	室町～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
37	北蔵寺	〃 〃 黒田庄町	墓	鎌倉～	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
38	御着城跡	〃 〃 姫路市	城	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
40	山城 平安京	〃 〃 京都府京都市	都市	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
41	河内 大坂城跡	〃 〃 大阪府大阪市	城、都市	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
42	和泉 堺城跡	〃 〃 堺市	都市	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
43	和泉 奈良寺跡	〃 〃 奈良県奈良市	都市	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
44	紀伊 根来寺跡	〃 〃 和歌山県	寺院	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃
45	阿波 安国寺跡	〃 〃 徳島県	墓	室町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	〃

※ △は推定

11. 大槻 伸「丹波」『世界陶磁全集 3 日本中世 3』小学館 1977
12. 榑崎彰一「丹波」『日本陶磁全集』11 中央公論社 1977
13. 中西 通『古丹波』丹波古陶館 1978
14. 大村敬通『三本峠北窯発掘調査報告書』遺物写真篇 兵庫県教育委員会 1980
15. 大槻 伸「丹波とその周辺」『日本やきもの集成 7 近畿 II』平凡社 1981
16. 長谷川真他『掘りだされた城下町姫路』兵庫県立歴史博物館 1985
17. 広瀬和雄他『能勢町における埋蔵文化財の調査 1—大阪府能勢町所在塩山 7 号墳・姫墓遺跡の発掘と古代・中世土器の研究—』能勢町教育委員会他 1985
18. 清水芳裕「胎土分析による窯跡出土須恵器の分類」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和 58 年度 京都大学埋蔵文化財センター 1986
19. 榑崎彰一『大丹波焼展』図録 大丹波焼展と現代に生きる六古窯展実行委員会 1988
20. 榑崎彰一『中世陶器シリーズ「丹波」』MOA美術館 1988
21. 長谷川 真「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究 IV』日本中世土器研究会 1988
22. 榑崎彰一「日本の陶器に描かれた絵画」『日本陶磁巻一—やきものに刻まれた絵画』愛知県陶磁資料館・五島美術館 1988

追 記

脱稿後、但馬生野銀山関連遺跡や播磨多可郡八千代町野々山城跡などから 16 世紀後半の丹波焼出土が増えている。中でも丹波窯の位置する小野原庄域内の井根口遺跡では、13 世紀、14 世紀代の丹波焼、壺、甕、播鉢が出土し、注目をひくものである。

最後になりましたが、大槻 伸氏には、播鉢の分類などにおいて発掘現場において多くのご教示を戴いていたが、十分に消化したとはいえず、改めて稿を起し、丹波焼研究の先学の業績を活かせるよう努力したいものである。